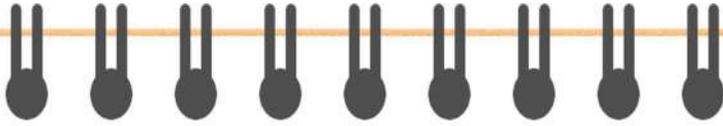


2月園だより



令和8. 1. 20 No.1
かきの木幼稚園
園長 川井 直子



えんちょうのふでばこ

かき畑にて

大地の息吹

若い頃（二十代であるがいつの年代かは言わない）インドに十日間旅行に行き驚いたことがある。当時のインドは日本と比較して驚くほど物価が低く、私達位の年齢でも最高級のホテルに泊まれた。なかでも日本人は、インドにとって上客であった。その頃のインドは観光に力を入れ現地のツアーガイドも「日本語」を一日八時間学び、三か月で養成していた程だ。インドの人的底力はすごい。ニューデリーでは、学校に冷房などなく中高生の授業を公園の木陰で行っていた。中国も同様であり、極寒の地でも暖房のない部屋で生徒は勉強に励んでいる様子を、文科省が派遣する「海外派遣教師」の方から聞いたことがある。

今、大国と言われるその国が、教育によって国力を上げようとした時代を散見した思いであった。だからか「その内、日本は負けるよ」との声を聞いた記憶もある。

話は代わって、十二月初旬、農園一面が薄っすら白い灰のようなもので覆われていた。「信ちゃんが土壌改良のため、木を燃やした後の灰をまいたのかな？」と思つて手のひらで軽く押ししてみたらまるで生き物の様にグッと押し返され強烈に驚いた。それは「初霜」で、「ピロート」のような感触だった。これまで目ではわかっていたものの直接大地に押し返された経験は、この時初めてであった。まさに「地球」は生きていてのを実感した。

そして、そこに生かされているのは「人間」であることも忘れてはいけない。「GDP」がなんだ!! 「人間そして子どもの内なる自然」も忘れてはならない。「かき畑や農園」の片隅で子ども達への愛を叫ぶ!? 「幼稚園」が少数派となりそんな時代であるが、幼稚園仲間
の思いは同じである。